

## 【特集】

# 「インド・ファッションの世界——素材から考える装い」 趣旨説明

国際ファッション専門職大学  
金谷美和

## 1 インドの装い

インド・ファッションを、ファッションの素材という観点から考えるというのがこのシンポジウムの趣旨です。

まず、インドの装いを見ていただこうと思います。一般の人びとが、日々の暮らしのなかでどのような衣装を着ているのか、また結婚式や祭礼の時にどのような衣装を着ているのか、ご紹介したいと思います。私は、インドの西部のグジャラート州というところで、長年、布を染める（布に色や柄をつける）職人の研究をしています [金谷 2007]。今から見ていただく写真の多くは、私の調査地で撮影したものです。

インドの装いと言えば、代表的なのは女性のサリー（サーリー）です。写真1の女性たちは、結婚式の帰りのようで、特別な装いをしています。すばらしい絞り染めの絹のサ

リーを着ている人もいます。サリーは、5メートルから6メートルの長さの布を下半身に巻き付けて、端を肩にかけます。写真2は、中間層の女性で、サルワール・カミーズを着ています。サルワール・カミーズは、サルワール（ズボン）、カミーズ（ブラウス）とドゥパッター（スカーフ）の組み合わせです。パンジャブ地方の民族衣装だったのですが、インド全国でおもに若い女性に着用されています。

インドは、一枚布を身にまとう衣装の文化をもっています。このような衣装を、服飾文化的には、「巻衣（まきい）」といいます。女性が頭から被る布のことを地元の言葉で、オダニー（オールニー）といいます。オダニー



写真1 サリー（サーリー）を着用する女性たち  
(2008年12月4日筆者撮影)



写真2 サルワール・カミーズ  
(2003年10月29日筆者撮影)



写真3 オダニーを着用したジャト女性  
(2005年3月1日筆者撮影)



写真4 男性の巻衣(まきい) ドーティー  
(2009年2月12日筆者撮影)

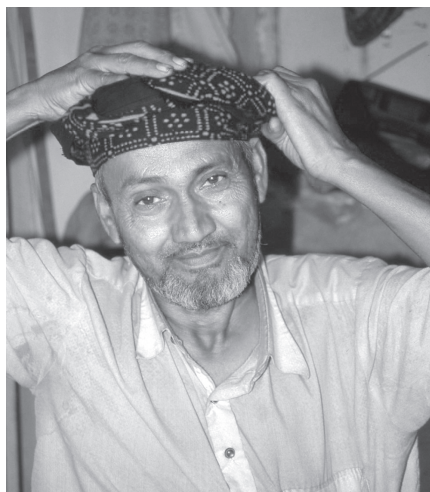


写真5 頭に巻く布 ルマール  
(1999年9月11日筆者撮影)

とは、被るもの、という意味です。

写真3はジャトというコミュニティの女性で、オダニーとワンピースを着用しています。赤いワンピースの胸元には刺繍がほどこされています。ワンピースのように布を身体にあわせて裁断し、縫製する衣装は、イスラームの影響でこの地域に入ってきたと言われています。

男性の衣装も巻衣です。男性が下半身に巻いている白い衣装は一枚布で、ドーティーといいます。写真4の左の男性は、3枚の布を身につけています。下半身に巻衣であるドーティーをまとい、肩には肩布を置き、頭にはターバンを巻いています。

男性の衣装として特徴的なのは、頭に布を巻くということです。ターバンにもさまざまな種類があり、写真5のものは正方形の形をしているもので、ルマールと呼ばれます。ルマールとはハンカチのことです。

女性の衣装は、刺繍やビーズで装飾されています。このような装飾はインド西部の衣装に特徴的なものですが、エスニックな装いとしてインドの他地域でも人気があります。この写真6は、インド西部の刺繍の一例です。小さい鏡を糸でとめつける技法はミラーワークと呼ばれています。ミラーワークと他の刺繍技法が組み合わせられ、布の表面に糸でみっちり文様表現がなされています。女性のス



写真6 インド「女性用スカート」  
国立民族学博物館所蔵  
(2008年5月28日国立民族学博物館撮影)

カートにほどこされています [三尾・金谷・中谷編 2008]。

このように、インドでは多様な衣装が着用されています。インドの衣装文化が多様なのは、衣装が歴史や社会、文化と結びついているからです。カーストや宗教、ジェンダーなどによって異なる社会規範があり、衣装はそれをあらわしています [金谷 2019]。このような社会に包含された衣装は、一般に民族衣装と呼ばれています。

## 2 「民族衣装」はモード

このように、インドでは伝統的な、いわゆる民族衣装が着用されています。伝統的なものは一般に、流行がなく不易なものだと思われるがちです。しかし、本当に伝統的な衣装や民族衣装は、モードやファッションとは無縁なものなのでしょうか。むしろその逆だといえます。長年インドのファッションを研究している杉本星子は、著書のなかでつぎのように述べています。

「伝統的な」民族衣装とは、本来、それが土地の人びとの生活のなかに根づき命を育んでいるかぎり、つねに最先端のファッションナブルなドレスなのである。 [杉本 2009: 5]

つぎの写真は、インド西部のサリー専門店で購入する女性たちです。絞り染めの衣装は、結婚式のときに必ず着るもので、伝統的な衣装であり民族衣装だと言えます。しかし、つねに流行があります。2018年の色の流行は、ネオンカラーと呼ばれる黄色やピンク色などの蛍光色でした (写真7)。

このようなサリーは、ファッションサリーと呼ばれます。婚礼衣装は、伝統的なもの、インド的なものが好まれると同時に、流行があります。その流行を、ファッション・デザイナーが先導することもあります。ファッション・デザイナーが創作するサリーはデザイナーズ・サリーと呼ばれます。たとえば、タルン・タヒリアニやマニシュ・マルホトラなどのデザイナーは、婚礼衣装のデザイナーズ・サリーを製作しています [杉本・三尾編 2005]。マニシュ・マルホトラは、パステルカラーを取り入れたサリーなどで知られています。パステルカラーは従来インドの伝統衣装にはなかったものですが、欧米のモードが取り入れられています。女優やセレブリティがこのようなデザイナーズ・サリーを着ると、それがコピーされて同じようなデザインの衣装が量産され、一般の人のあいだでも流行します。

リチュ・クマールは、伝統染織をモードに取りこんだインドのファッション・デザイ



写真7 サリー専門店で買い物をする女性たち  
(2016年2月24日筆者撮影)



ナーのパイオニアです。伝統的な染織品をもちいた宮廷衣装にインスピレーションを得た衣装をつくりました。彼女のデザインした衣装は、ミスワールドの祭典で候補者たちが着ることで、世界中にインド的な衣装のイメージを紹介しました。また、彼女の創作する衣装は、インド女性たちがあこがれる婚礼衣装のイメージになりました。

かつては、インドは単にファッションの素材の提供地でしたが、インド政府は、ファッション産業を発展させるために、デザイナー養成のための国立の高等教育機関を整備しました。それが功を奏し、インド国内外で活躍するファッション・デザイナーが輩出しています。近年パリコレで作品を発表しているのがマニッシュ・アローラです。彼は2008年からパリコレで発表しています。レディ・ガガやブリトニー・スピアーズなどアーティストたちが彼の衣装を好んで着用しているといわれます。

### 3 ファッションに影響を与えてきたインド

実は、インドはヨーロッパのファッションに大きな影響を与えてきました。たとえば、パリコレで発表するデザイナーのなかには、インドにインスピレーションを得た作品をつくる人もいます。ジョン・ガリアーノがクリスチャン・ディオールの2001 - 2002年の秋冬のコレクションとして発表したものや、イザベル・マタンの2002 - 2003年コレクションにはインド西部の衣装の影響がみられます〔文化出版局編 2001；NHK きんきメディアプラン編 2004〕。ジョン・ガリアーノは、バンジャラーという集団の女性用上衣の装飾や色づかいに酷似した作品を発表しています。バンジャラー女性は上衣にミラーワークや刺繍をほどこしているのですが、その装飾が取りいれられています。

イザベル・マタンの作品は、ジャトという

集団の女性のワンピース（写真3）に酷似しています。ジャトは、牧畜を生業とするグループです。ジャトの衣裳の胸元には、ミラーワークという小さい鏡を糸でとめかかった刺繍がほどこされています。ビーズでつくった首飾りなどの装飾品でも知られています。刺繍やビーズによる装飾は、さまざまなデザイナーによって取りいれられています。ビーズにまつわる話は、このあと遠藤仁さんのお話になります。

このように、インドはヨーロッパのファッション・デザイナーにインスピレーションを与えてきました。一方で、民族衣装のデザインをそっくり流用するような商品は、近年では当該民族から知的所有権の侵害であると異議申し立てがおこるなど、問題になっています。

日本のファッション・デザイナーとしては、イッセイ・ミヤケが早くからインドの素材に注目していました。1980年代からカーディーという手紡ぎ手織りの木綿布を作品に取りいれていました。イッセイ・ミヤケのレーベルの1つであるHaaTでは、テキスタイルデザイナーの皆川魔鬼子が、インドの素材や職人の技に注目し、インドの職人と長年仕事をしています〔皆川 2009: 6〕。2017 - 2018年秋冬コレクションでは、インドのピリ刺繍というミシン刺繍によって模様がつけられていますが、ミシンを扱う熟練の職人なしには成立しない技法です。

インドがヨーロッパのファッションに与えた影響は、最近のものだけではありません。18世紀にはすでに、インドの染織品はヨーロッパの人びとの心をつかみ、その服飾の流行を作りだしていました。たとえば、図1は18世紀フランスのファッション・リーダーであったボンパドール夫人の肖像画ですが、彼女は「チンツ」と呼ばれるインド産の染め模様のある木綿布をドレスに仕立てて着ています。

もう1つ、18世紀から19世紀のヨーロッ



図1 「ポンパドール夫人」  
 フランソワ＝ユベール・ドルー作、1764年  
 ロンドン、ナショナル・ギャラリー所蔵  
 出典：[Crill 2008: 19]

パのファッションに影響を与えたのは、カシミア・ショールです。カシミア・ショールとは、インドの北部のカシミール地方でヤギの毛から織られた織物のことです。カシミア・ショールは、もともとはカシミール地方の王侯貴族の男性がまとっていた防寒具でした。17世紀にインドで描かれた肖像画にカシミア・ショールが示されています。

18世紀末から19世紀初頭のヨーロッパにおいて、インド産の薄い木綿布でドレスをつくるのが流行しました。それが薄着だったために、防寒としてドレスの上からショールをまとうことが流行しました [レヴィー・ストロース 1988]。フランスの皇帝ナポレオン・ボナパルトの妻ジョゼフィーヌはカシミア・ショールのファンで、図のようにショールからドレスを仕立てて着ていました (図2)。彼女の着ていたカシミア・ショールの文様はショールに典型的な文様です。それがのちに、カシミア・ショールのコピーが製造された英国の地名をとってペイズリーという名前でも知られるようになり、ショール以外の



図2 「ジョゼフィーヌ皇后」  
 アントワヌ＝ジャン・グロ作、1809年  
 ニース、マセナ美術館所蔵  
 出典：[レヴィー・ストロース 1998: 24]

服飾のデザインとしても用いられるようになりました。

#### 4 素材の力——素材の特性がファッションを動かしている

このように、インドがヨーロッパのファッションに影響を与えてきたということを見てきました。その影響には、大きく分けて2つあります。1つは意匠（デザイン）です。そして、もう1つ大事なものは、このシンポジウムのテーマでもある素材です。ここで述べたいのは、素材の特性がファッションを動かしてきたのだということです。

たとえば、チンツの流行をもたらしたのは、木綿布の特性です。木綿布の特性は、薄く、柔らかく、肌さわりがよいことです。しかも、インドは木綿布に色や模様をつける技術の先進地域でした。染料や染色技法の発展は、染色による布の多種多様な文様表現を可能にし

ました。

それまでヨーロッパは、羊毛布と亜麻布が衣装のおもな素材で、織りと刺繍による文様表現が一般的でした。それが、インドの影響によって、プリント（捺染）のような染色による表現が多様に展開するようになりました。この展開には、染料もかかわってきます。竹田晋也さんがお話になる赤色染料の素材であるラックはその1つです。つまり、素材の特性がファッションを動かしているといえるのです。

もう1つは、カシミア・ショールの素材であるカシミアヤギです。カシミアヤギの毛の特徴は、柔らかく、肌さわりがよいこと、そして発色がよいことです。糸が細く、織りによる繊細な文様表現も可能でした。素材としての獣毛や羊毛については、渡辺和之さんの発表につながります。

本シンポジウムでは、インドがファッションの素材の宝庫であることを示します。チンツやカシミア・ショールの例でみたように、素材の特性がファッションを動かします。さらにインドがすごいのは、今でも手仕事により素材が作られているということです。このシンポジウムでは、素材を制作する現場で研究を重ねてこられた研究者にお話をうかがいたいと思います。

発表者は、3人になります。まず、渡辺和之さんには羊毛についてお話しいたします。つぎに、遠藤仁さんにはビーズについてお話しいたします。最後に竹田晋也さんには、ラックについてお話しいたします。この3人は、作っている現場に足をくりかえし運んで、ご自分の目で見て、生産者のかた

に直接話をきくことで、研究をされてきました。この3人しか知らない素材の世界を、今日は教えていただけることと思います。

さらに、発表のあと、3人にコメントをいただきます。上羽陽子さんには染織の素材、技術の観点から、富澤修身さんにはファッション産業史の観点から、野田隆弘さんには愛知県と岐阜県にまたがる羊毛織物産業との比較の観点から、それぞれコメントをいただきます。みなさま、どうぞ、シンポジウムを楽しんでいただけますと幸いです。

### <参考文献>

- NHK きんきメディアプラン編 2004『シルクロードの装い』NHK きんきメディアプラン。
- 金谷美和 2007『布がつくる社会関係——インド絞り染め布とムスリム職人の民族誌』思文閣出版。
- 金谷美和 2019「伝統ある絞り染め布をファッションとしてまとう——装いからみる現代インド社会の変容」山田孝子・小磯千尋編『文化が織りなす世界の装い』英明企画編集、pp. 91-104。
- 杉本星子 2009『サリー！サリー！サリー！——インド・ファッションとフィールドワーク』風響社。
- 杉本良男・三尾稔編 2005『装うインド——インド・サリーの世界』千里文化財団。
- 文化出版局編 2001「民族衣装とモードの関係」『装苑』(12): 34-43。
- 三尾稔・金谷美和・中谷純江編 2008『インド刺繍布のきらめき——バシン・コレクションに見る手仕事の世界』昭和堂。
- 皆川魔鬼子 2009「インドの手ざわりを取り入れたファッション・ブランド HaaT」『月刊みんぱく』33(2): 6。
- レヴィ・ストロース、モニク 1988『カシミア・ショール——歴史とデザイン』平凡社。
- Crill, Rosemary 2008 *Chintz: Indian Textiles for the West*. Ahmedabad: Mapin Publishing.